

## 今年度調査成果の概要

### いわくら 岩倉遺跡 - 木簡・人形などの祭祀遺物を発見 - (糸魚川市大字田伏字岩倉)

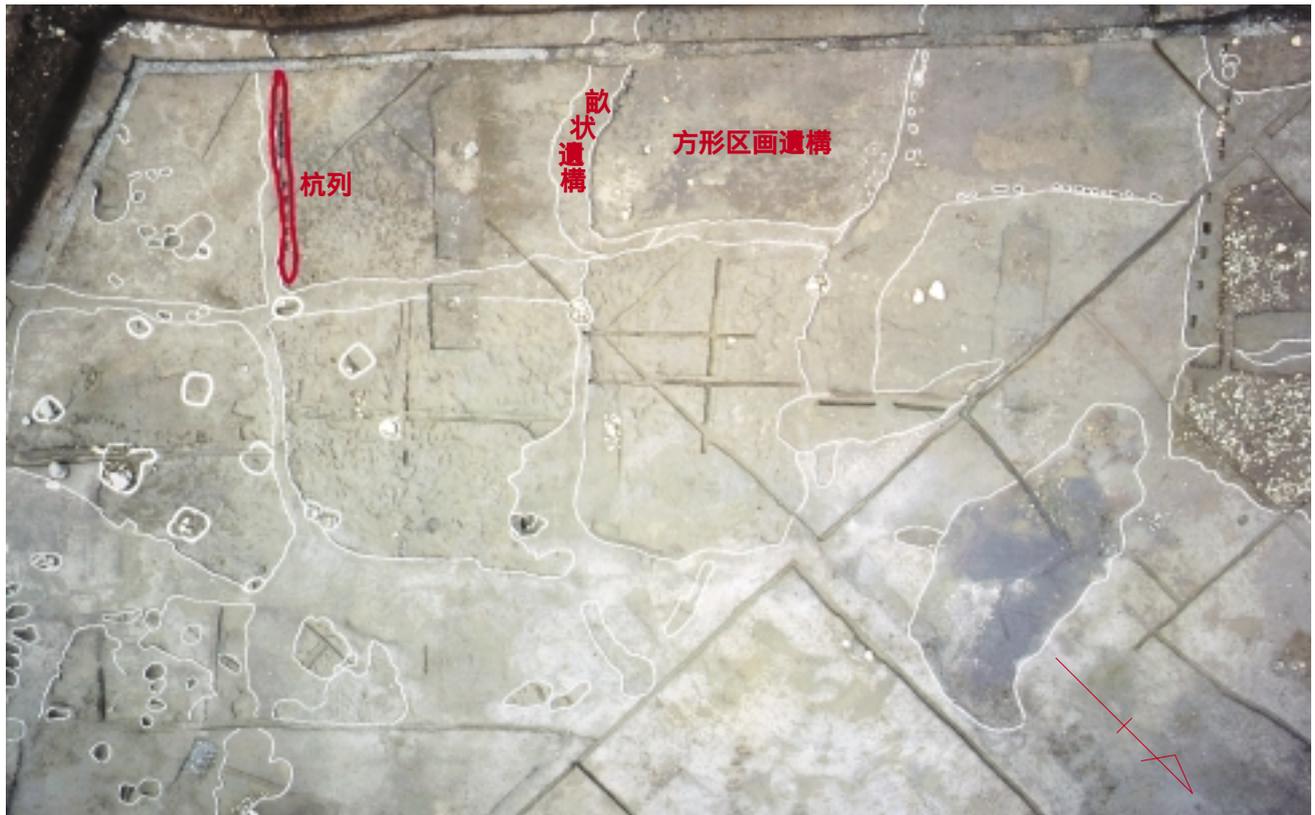
4月から半年かかった調査も9月末日で終了しました。調査の成果をお知らせします。

山際に沿って、方形区画遺構10基が確認されました。一辺約8mほどで、地形的に北にゆるく傾斜する斜面に作られ、どの区画も南側をやや深く削りこんでいます。さらに各遺構の南辺に直径5cmほどの杭が約30cmほどの間隔で打ち込まれています。土留めの杭列と考えられます。また各方形区画の間には幅50cmほどの空間があり、道として利用したと考えられます。この区画遺構の周辺からは、祭祀に係わる木製品が出土しています。

出土した土器から、15世紀ころの遺構と考えられます。ほかに遺物は木製品・金属製品・石製品など多種多様なものがあります。  
(山本 肇)



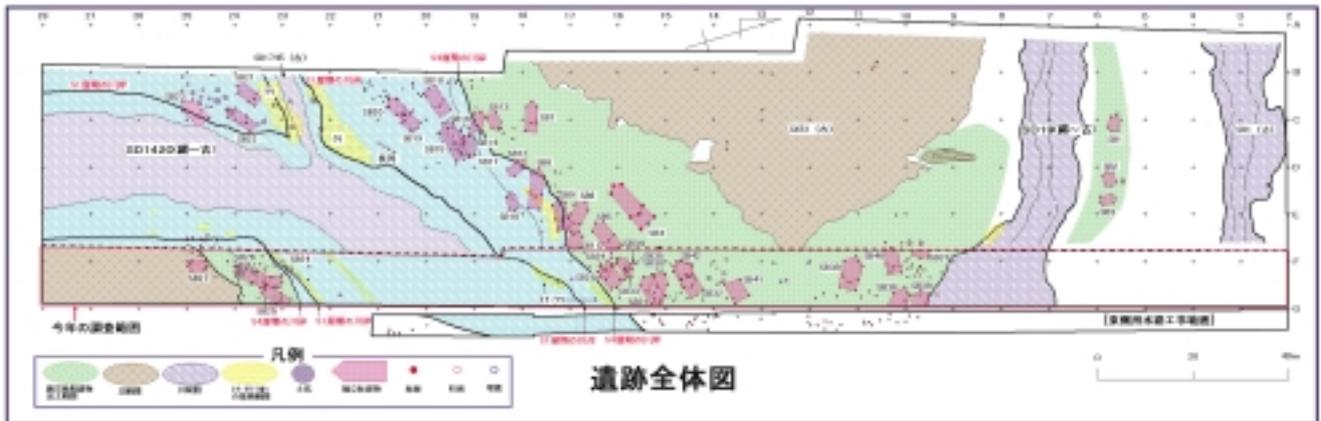
1号木簡出土状況



方形区画遺構と畝状遺構（東から）

## あおた 青田遺跡 - 低地集落の構造が明らかに -

(北蒲原郡加治川村大字金塚字青田)



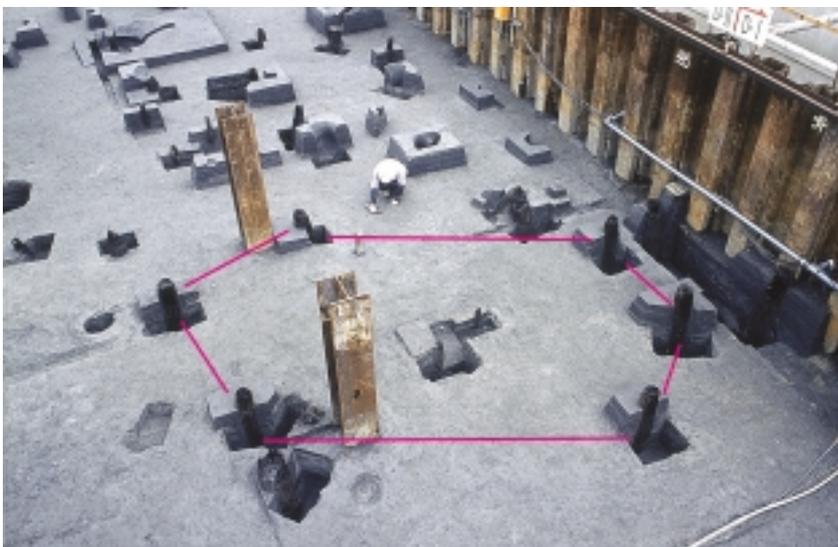
平成13年度調査範囲北半 (南西から)

平成13年度は平成11・12年度の調査範囲の東側に隣接する南北270m・東西12mの範囲を調査しました。その結果、調査区北側にある幅約20mの川跡(S D19)と南側にある幅40m以上の川跡(S D1420)との間、およびS D1420の南岸において多数の掘立柱建物や土坑・炭化物集中範囲などを検出しました。

掘立柱建物は19棟が新たに見つかり、昨年度までのものを含めると合計42棟になります。また、出土した柱根の合計は410本を超えます。張り出し柱を含めた長軸が7～8mの中型建物が多いほか、長軸2mの小型掘立柱建物も検出されました。川の両岸に沿って多数の掘立柱建物が建てられていたことが明らかになりました。

掘立柱建物列とほぼ同じ範囲から長さ1m前後の楕円形の土坑や長さ30cm程の小形の土坑を合計15

基検出しました。このうち、長さ126cm・幅110cmの土坑の底面には、長軸方向と同じ向きに草材が敷き並べられていました。そして、この上に直径1cmの枝材が草材と直行して20cm間隔で6列置かれ、さらに枝材を挟むように上から枝を打ち込んで固定しています。おそらく、土坑内部には地下水がしみ出て溜まっていたものと考えられ、木の実などを水漬けて保存ないし何らかの加工作業を行っていたものと考えられます。



中型掘立柱建物

S D 19とS D 1420との間の範囲では、掘立柱建物列の陸地側に並行するように炭化物集中範囲を検出しました。ここでは赤漆塗りの糸玉や腕輪などの漆製品が出土したことが特徴です。炭化物集中範囲は屋外炉とも考えられますが、明確な炉跡は見つかっていません。また、埋<sup>うめがめ</sup>甕が5基検出されましたが、すべて当時の地表面から数cmだけ埋めたものであり、墓の可能性も含め検討する必要があります。炭化物集中範囲は遺物廃棄域のほか、漆製品の製作などの作業エリア、そして、墓域も兼ねていた可能性が考えられます。



埋甕

それぞれの川跡の斜面部からは大量のクリのほか、トチやクルミ・ナラガシワの果皮が出土しました。S D 19の川底からは土器片とともにシジミなどの貝殻が出土し、水産資源の利用も徐々に明らかになってきました。

今年度の調査により、掘立柱建物列と炭化物集中範囲が並行して存在することや、川跡の対岸にも集落が展開していることがわかり、集落の様子がさらに明らかになりました。( 荒川隆史 )



草材が敷かれた土坑と掘立柱建物の柱根

## しょうじゃく 正尺A遺跡 - 古墳前期の集落跡 -

(豊栄市葛塚字正尺)

昨年度から調査を継続している正尺A遺跡は、古墳時代前期(約1,700年前)の集落の跡です。遺跡は阿賀野川右岸、旧大口川によって形成された自然堤防上に立地しています。同一堤防上には昨年度調査が行われた正尺C遺跡のほか、同じ時期の遺跡が数か所存在しており、一連の集落をなしていたと考えられます。

調査では、竪穴住居跡1棟、墓と思われる土坑1基が見つかりました。竪穴住居跡は1辺約5mの隅の丸い方形で、中央付近に炉と思われる炭化物の集中が見られました。墓は長さ2m、幅1.5m、深さ0.5mの楕円形の穴で、中から赤く装飾された壺や器台(壺を載せる台)が出土しました。これらの土器は死者を葬る儀式に用いられたものであると考えられます。

その他にも多数の土器が出土しており、煮炊きに使われる甕や貯蔵のための壺、食器としての椀や鉢など様々な形のものが見られます。中には東海地方や近畿地方で用いられた土器の形を真似て作られたものもあり、当時の地域間交流の様子を知る手がかりを与えてくれます。

近年、阿賀野川以北の地域では古墳時代遺跡の発見・調査が相次いでいます。各遺跡の立地や存続した期間等を見ると、洪水などの自然環境変化にともない、集落の場所を移動していると考えられます。昨年度の成果とも合わせ、正尺Aでは、古墳前期以降、平安・鎌倉時代の遺物が少量見られる以外、生活の痕跡があまり見られなくなります。近世後期(18世紀後半)の新田開発によって、現在見られるような村落風景が形成されたと考えられます。

正尺A遺跡の成果は、古墳時代の生活の様子を復元する重要な資料であるとともに、新潟平野の土地利用の変遷を捉える格好の材料であるといえます。

(尾崎高宏)



調査区全景



竪穴住居完掘



壺出土状況

## 報告書作成中の遺跡 - 黒田古墳群 -

上越市にある黒田古墳群は、古墳時代中期後半～後期初め（5世紀後半～6世紀初め）の古墳25基からなる群集墳です。上信越自動車道の建設に先立ち、平成8・9年の2か年にわたり13基を調査しました。

古墳の埋葬主体部（お棺を埋めた場所）からは鉄製の刀・剣、斧・鋤先<sup>すきさき</sup>などの武器や農工具類が、また、古墳東側の周溝（周りに掘られた溝）底部で土師器や須恵器の壺や高杯が出土しています。古墳群の特徴として、いずれも木棺直葬<sup>もっかんじきそう</sup>で石室をもたず、管玉などの玉類の副葬が少ないこと、甲冑（武具）や馬につける金具など（馬具）が見られないことなど、南魚沼郡六日町で近年調査が行われた飯綱山古墳群・蟻子山古墳群<sup>いひづなやまこふんぐん ありごやまこふんぐん</sup>とはそのあり方を異にしているようです。

また、古墳群の下層は縄文前期の遺跡で、竪穴住居跡や狩猟のための陥穴<sup>おとしあなれつ</sup>列などが見つかり、それらに伴い多数の遺物が出土しています。関東・東北地方の影響を受けた土器や糸魚川周辺で産出される蛇紋岩<sup>じやもんがん</sup>を磨いて作られた石斧など、当時の地域の交流を示す良好な資料であるといえます。

その他、少量ですが縄文草創期の槍先<sup>ゆづせせん</sup>（有古尖頭器<sup>とうき</sup>）や縄文中期・晩期の土器もあり、縄文人の活動が連綿と続いていたことを物語っています。

（尾崎高宏）



古墳完掘全景



縄文前期竪穴住居跡

## ホームページの利用状況について



ホームページの最初の画面

昨年8月1日に当事業団のホームページが開設されて以来、1年2ヶ月余りが経過しました。県内を中心に徐々にホームページの存在が知られるようになり、アクセス数も伸びてきています。また定期的に利用される方も増えてきています。ホームページには、what is 埋文事業団、発掘現場情報、埋文にいがた最新号、体験学習案内、収蔵品画像、速報・掲示板などのコーナーがあります。一般の方々への考古学関係の情報提供は勿論、学校現場への情報発信という機能にも重点を置いています。掲載内容は順次更新していきますので、気軽にご利用ください。アドレスは次の通りです。http://www1.ocn.ne.jp/~n-maibun/ 尚、アドレスの中の「」（チルダ）の入力は、英数半角入力状態で、「shift」キーを押しながら「々」キーを押してください。

（資料担当普及班）

## 考古遺物を活用した授業実践例

- 県立新津南高校第2学年・日本史授業より -

新潟県埋蔵文化財センターでは、考古遺物の有効活用を目指し、学校現場の要請に基づき、センターが所蔵する考古遺物を学校へ貸し出すという試みを行なっています。ここでは今年度の日本史の年間指導計画に考古遺物の活用を組み込んだ新津南高校の取り組みを紹介します。

回数	実施月	学 習 テ ー マ	使用する考古遺物
1	4月	縄文時代の生活環境 - 食生活を中心として -	縄文土器・石鏃・石斧
2	9月	律令国家から王朝国家への変遷	須恵器・土師器・墨書土器
3	11月	中世における武士のたしなみと茶の湯文化	中国製陶磁器（青磁・白磁・天目）
4	3月	江戸時代の町民文化 - 生活様式を中心として -	伊万里焼を中心とした近世陶磁器

### 新津南高校の考古遺物を活用した学習計画

新津南高校では、ここ数年、日本史授業の中で、新潟県の歴史を学ぶ一つの機会として、埋蔵文化財センターの見学を実施してきました。今年度は新たな試みとして、上記の表で示したように年間で4回、センターの考古遺物を借りて授業を行なう計画を立てました。

現在は2回目までを実施した段階ですが、4月は縄文土器や石器を活用し、当時の生活様式に迫ろうとするねらいの下、授業を行ないました。縄文土器や石器などの道具類から縄文人の知恵や工夫を見出すのは勿論、道具を通して当時の食生活を中心とする生活環境にまで生徒の考えが広がることを期待し、ある程度その目標は達成されたように思います。次いで、9月には土師器・須恵器を活用し、奈良・平安時代の政治と文化を焼き物という側面を通して考えようという授業を実施しました。教科書では、古墳時代に入ると、弥生土器の系譜を引く土師器並びに朝鮮から伝播した灰色で硬質な須恵器の生産が始まったと記述されています。しかし、見方を変えると、須恵器窯の変遷からも、律令国家の成立と崩壊、そして王朝国家への変貌を窺うことができます。具体的には、律令国家の根幹ともいえる郡の統括者である郡司が国司に圧迫され、一郡一窯の体制が維持できなくなります。その結果、佐渡小泊窯群で作られた須恵器の流通拡大につながり、地方の歴史から中央政治の変化を読み取ることができます。このように土師器や須恵器を食膳具の観点からだけで捉えるのではなく、奈良・平安時代の政治体制の変化を語る上での貴重な資料として活用することもできます。

2回の授業実践を通して考古遺物を活用するメリットは、主に次の3点が挙げられるように思います。

県内の出土遺物と歴史的事実を結びつけることで、歴史を身近に感じることができる。

教科書や資料集の写真ではなく、本物を見ることで、立体的な視覚に訴えることができる。

中央の歴史だけではなく、身近な埋れた歴史にも焦点をあてることができる。

遺物を使った授業の感想を生徒に聞いてみると、概ね好評であり、今後も県内の考古遺物や遺跡を活用することによって、生徒の歴史に対する興味を引き出していきたいと考えています。（新津南高校教諭 會田哲郎）



授業で使った土師器・須恵器



9月に行なった授業の様子

## 埋文コラム「発掘から見えてきた遊戯具の歴史」

### 古代の玩具?...ミニチュア土器

各地の遺跡から、日常的な土器に比べて極端に小さな土器が出土することがあります。これらの土器はミニチュア土器と呼ばれており、縄文時代早期から近世までの幅広い年代に渡って認められます。文様がないものから、複雑な文様を忠実に模したものであります。形も壺や鉢、台付きのもの、注ぎ口の付いたものなど様々です。

しかし、これらの機能・用途はまだはっきりしていません。世界各地の民族のミニチュア土器の使い方をみると、祭り儀式や呪術を始めとして、墓の副葬、子供の玩具など様々な用途に使われています。

県内でも塩沢町の五丁歩遺跡(縄文時代)や、上川村の北野遺跡(縄文時代)などからの出土例が報告されています。写真からも分かるように、これらのミニチュア土器は大変小さくかわいらしいもので、当時の子供達もこうした土器でままごと遊びをしていたのかもしれませんが。



北野遺跡のミニチュア土器



木田遺跡出土の独楽

### 元祖ベイブレード...こま独楽

独楽は奈良時代の頃には、既に大陸から日本に伝来していたようです。竹の先に皮ひもを付けた鞭で打って、回して遊んだ様子が、鎌倉時代の絵巻物にも描かれています。

県内では、上越市の木田遺跡(平安~中世)から独楽が6点出土しています。中心に鉄製芯棒を入れていたようですが、出土した独楽のなかには、鉄製芯棒が中心軸から外れて斜めに入っているものもあります。こうした独楽は、回転させるのにかなり苦労したのではないかと考えられます。

### 大人の遊び...将棋

将棋は奈良時代に中国から日本に伝わったとする説が有力ですが、現在のところ、興福寺旧境内から出土している駒が、日本で最古(1058年頃)のものとしてされています。

県内では、加治川村の砂山中道下遺跡(平安・中世・近世)から、中世の駒が1枚出土しています。出土した駒は一部剥落していますが、表に「銀将」、裏に不明瞭ながら「金」と考えられる文字が黒い顔料で書かれています。



砂山中道下遺跡出土の将棋駒(表・裏)

#### 引用・参考文献

- ・(「考古学による日本歴史」12 芸術・学芸とあそび)大塚初重他編 雄山閣 1998
- ・(「縄文土器大観」3 中期)小林達雄・小川忠博著 1988
- ・(「木器集成図録」史料第27冊 近畿古代篇)奈良国立文化財研究所 1985

県内の遺跡・遺物34

はちまんばやしかん が

**八幡林官衙遺跡出土遺物（平成9年 県指定）**

遺跡所在地：三島郡和島村大字島崎・両高字八幡林

八幡林官衙遺跡は信濃川支流、島崎川流域の谷に突き出た低い丘陵上とそれを取り巻く低地にあります。国道116号バイパス建設に伴い平成2年に発掘調査を行った結果、完形の郡符木簡や「沼垂城」と記載された木簡が出土し、官衙関連遺跡として全国的にも注目されました。その後平成3年から5年の調査では、木簡や墨書土器など数多くの文字資料が出土しました。

郡の四等官の長官である「大領」や郡の具体的施設を表す「厨」などと記された墨書土器は、9世紀頃この遺跡が古志郡衙の郡庁の一角ないしは大領の館であったことを物語ります。そして「大家驛」と書かれた墨書土器の出土により、古代北陸道の駅家が遺跡付近に存在し、この遺跡が国府の出先機関や駅家などが併置された複合的な官衙であることが分かってきました。また物品の受け取り・請求の文書を示した木簡や貢進物の付札などから文書を活発にやり取りする9世紀古志郡の具体的な行政の様子が明らかになり、文書を入れて運ぶための文箱や文書を送る際宛名を書いて使用した封緘木簡の出土により、正式な作法による行政事務が地方にも浸透していたことが分かりました。



「沼垂城」の木簡

(写真提供 和島村教育委員会)



「大領」と記された墨書土器群 (写真提供 和島村教育委員会)

## 埋文にいがたNo. 36

発行(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新津市金津93番地1 e-mail: maibun@coral.ocn.ne.jp

TEL (0250) 25-3981 FAX (0250) 25-3986

印刷(株)文久堂